

研究者リーダーシップ・プログラム

「第7回 自身の強みを生かしてリーダーシップを執る」参加レポート

今回の研修を通じて、リーダーシップとは単に指導力を発揮することではなく、自身の強みを活かしながら仲間と win-win の関係を築くことが重要であると学びました。特に、自己マネジメントの手法を習得することが、より効果的なリーダーシップの発揮につながるという視点は印象的でした。

前半では、日本における DEI（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン）の現状と課題についての講義が行われました。多様性の確保は組織の活性化戦略として不可欠であり、限定的な価値観にとらわれることが社会の発展を阻害する要因となることが指摘されました。一方で、ジェンダー平等の推進は、イノベーションの創出を促進し、より柔軟な働き方や職場環境の形成に寄与する基盤であると示されました。これにより、個人の自己実現が可能となり、誰もが安心して働き続けられる職場づくりにつながるという点に深く共感しました。

後半では、東村先生の言葉のひとつひとつが、リーダーシップの本質を考える上で新たな視野を開いてくださいました。座右の銘として紹介された「悲観主義は気分だが、楽観主義は意志である」にも深く感銘を受けました。不安や迷いは誰もが抱えるものですが、それに流されるのではなく、意識的に楽観的な姿勢を持つことが、前向きな行動につながるのだと気づかされました。この考え方を取り入れることで、私自身も、しなやかに柔軟に、楽しみながらアカデミアでのキャリアを築いていけたらと思いました。

日々の業務に追われ疲弊していた中で、本来、私は教育や研究への情熱を持ってこの道を選んだのだと、研修を通じて、職務の意義を再認識し、初心に立ち返ることができたことは、大きな収穫でした。

全体を通して、リーダーシップとは個人の能力だけでなく、環境や周囲の人々との関係性の中で培われるものであると改めて実感しました。また、多様性を尊重することが組織や社会の発展に必要であることを理解し、自らもその一端を担う存在として行動していきたいと強く感じました。東村先生のお話は、大学教員としての在り方について多くの示唆を与えてくださるものであり、今後も指針として何度も立ち返りたいと感じる貴重な機会となりました。

（ヒグネット真妃・名古屋大学言語教育センター 准教授）